

## 論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（口腔健康科学）	氏名	澤 幸子
学位授与の条件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 Occlusal support is associated with nutritional improvement and recovery of physical function in patients recovering from hip fracture (回復期大腿骨骨折患者における咬合支持は栄養改善および身体機能回復と関連する)			
論文審査担当者			
主査教授	谷本 幸太郎	印	
審査委員 教授	太田 耕司		
審査委員 准教授	田地 豪		
<p>〔論文審査の結果の要旨〕</p> <p>高齢者における大腿骨骨折は、身体機能の低下、QOLの低下、死亡率などに関連しており、世界的な問題となっている。また大腿骨骨折患者の多くは低栄養を合併している。低栄養は筋力低下、免疫能低下、認知機能低下、在院日数の延長などに関連しており、臨床現場での低栄養対策は必須となっている。さらに最近の研究では、低栄養状態にある患者のADLは回復しにくい一方で、栄養状態が改善すると、ADLも改善すると報告されていることから、リハビリを実施している施設での栄養管理への関心が高まっている。</p> <p>低栄養の原因は、食事摂取不良、疾患、認知症、社会的背景など多岐にわたる。歯の喪失は咀嚼機能を低下させ、食事摂取不良を招くことから栄養状態を悪化させる因子の一つと考えられている。先行研究では咬合支持は栄養状態とより強い関連があると報告されている。本研究の目的は、回復期リハビリテーション病棟入院中の大腿骨骨折患者を対象に、咬合支持が栄養改善およびADLの回復に関連しているかを明らかにすることにある。</p> <p>対象者は、申請者が勤務する病院の回復期リハビリテーション病棟へ入院し、退院をした65歳以上の大腿骨骨折患者とした。対象者から他病院へ転院となった患者、嚥下障害のある患者、入院中に歯科治療を受けた患者を除外した。対象者を臼歯部の咬合支持の状態によって咬合支持あり群、咬合支持なし群に分け、入院時および退院時の栄養状態、ADLなどを比較した。栄養状態はMNA-SF (Mini Nutritional Assessment-Shor Form)、ADLはFIM (Functional Independence Measure)により評価した。FIMは運動項目、認知項目に分け、FIM利得（退院時FIM－入院時FIM）、FIM効率（FIM利得／在院日数）についても分析した。また多変量解析により咬合支持が栄養改善およびADLの回復に影響しているかを分析した。</p> <p>分析の結果、咬合支持あり群は152名、咬合支持なし群は50名（であった。入院時の比較では、咬合支持あり群のほうが、年齢が高く（<math>p = 0.049</math>）、女性の割合が多かった（<math>p = 0.016</math>）。またFIM合計（<math>p = 0.027</math>）およびFIM認知項目（<math>p &lt; 0.001</math>）において咬合支持あり群の方が有意に高かった。退院時の比較では、咬合支持あり群において、栄養状態が改善している患者の割合が多かった（<math>p &lt; 0.001</math>）。さらにFIM利得（<math>p &lt; 0.001</math>）、FIM効率（<math>p &lt; 0.001</math>）において咬合支持あり群の方が有意に高かった。ロジスティック回帰分析の結果、咬合支持は栄養改善の独立因子であることが示された[オッズ比=4.00, 95%信頼区間=1.9-8.43]。また重回帰分析の結果、咬合支持はADL改善の独立因子であることが示された[<math>R^2=0.338</math>, <math>p &lt; 0.001</math>]。</p> <p>以上の結果から、本論文は①咬合支持は栄養改善に関連する独立因子であること、②咬合支持はADL改善に関連する独立因子であることを明らかにし、栄養状態およびADLの回復における咬合支持の維持・回復の重要性を示した。</p> <p>よって審査委員会委員全員は、本論文が澤 幸子に博士（口腔健康科学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			